

インフルエンザについて

● インフルエンザとは？ ●

インフルエンザには主にAソ連型・A香港型・B型の3種類があり、1人の人が1シーズンに複数回かかることもあります。空気感染により流行し潜伏期間は1~2日です。インフルエンザウイルスは発病後3~5日間はのどから排出され感染力があるため、熱が下がっても2日間は隔離が必要です。

☆症状と検査

成人や学童では突然の高熱から始まり、咽頭痛、頭痛、関節痛、四肢痛、倦怠感など全身的な症状が強いのが特徴で、解熱後に咳や鼻水が目立ってきます。一方乳幼児では高熱と咳、鼻水が中心となるため他の風邪との鑑別が困難ですが、気管支炎や肺炎、中耳炎、まれに脳炎・脳症といった合併症を起こします。鼻水で行う検査は、特に発病早期ではインフルエンザであっても陽性に出ないことがあるため、疑わしい場合は翌日の再検査が望ましいでしょう。

☆治療

タミフルやリレンザを使用した方の転落死が報道されましたが、これらの薬を使用していない方でも同様の事故は起こっています。このためこうした異常行動はインフルエンザ感染自体による可能性が高いのですが、現時点では薬の副作用も否定できません。お子様がインフルエンザにかかった場合、薬の使用の有無に関わらず発病2日間は目を離さないようにして下さい。

1タミフル：発病48時間以内に投与すると、熱の下がり方が1日早くなり合併症も減るとされています。10歳代への投与はできません。

2リレンザ：5歳以上の方に発病48時間以内に投与します。口から薬のパウダーを吸入するため患部（鼻やのどの奥）に薬が直接到達して、速やかに効果が現れます。又吸入された薬の2%程度しか体内に吸収されないため、副作用のリスクは低いと考えられます。

（補足）最近麻黄湯という漢方薬のインフルエンザに対する効果が注目されています。熱があってもあまり汗をかかず元気にしていて、熱のある期間だけ1日6回（無理なら3回）飲ませてください。麻黄湯は身体を内側から温めて発汗を促して熱を下げる薬ですので、解熱薬は併用しない方が望ましいでしょう。

☆予防接種

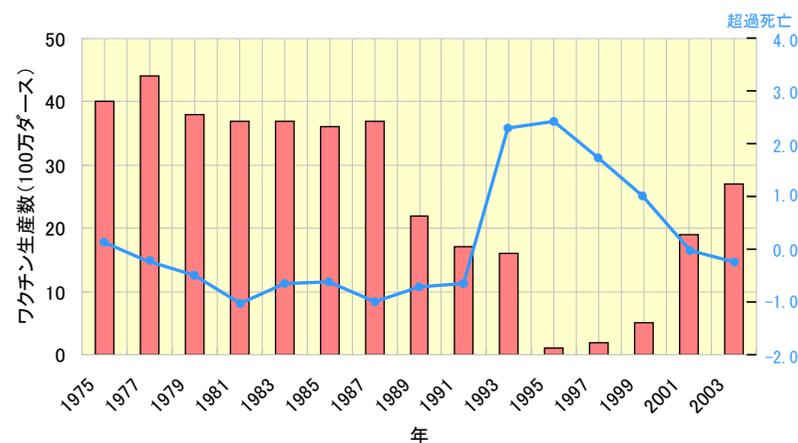
ワクチンの効果は接種後2~3週間程度で現れ半年近く持続します。13歳未満は1~4週間間隔で2回接種しますが、接種間隔が短いと免疫が付きにくい傾向があるため、3~4週間あけることが望ましいでしょう。

ワクチンは鶏卵を使い製造されますが1ml中に含まれる卵白成分は欧米のワクチンに比べて極めて微量（表）で、少なくとも卵の加工品を食べているような子供なら全く問題なく接種できます。

（表）インフルエンザワクチンに含まれる卵白濃度

日本	0.83~10.3	
アメリカ	20~1200	
ヨーロッパ	20~650	(ng/ml)

インフルエンザウイルスは毎年変異するためワクチンによる完全な予防は無理ですが学童以上では発症を5割程度減らす効果が認められています（それより小さいお子さんでは効果はより低くなります）。そもそも発症しなければ重症化はしませんから脳炎などの重症化にも予防効果のあることが分かります。実際1990年代にワクチンの接種率が低下したことに一致して小児の脳炎・脳症が増加しましたが、2001年から幼児におけるワクチンの接種率が上昇したのに合わせ脳炎・脳症の発生は減少しています（図）。インフルエンザワクチンの接種率を向上させることは、重症化しやすい乳幼児や高齢者をインフルエンザから守ることにつながります。



（図）幼児の死亡数とワクチン生産量

